世界遺産暫定一覧表記載資産候補
提案書

埼玉古墳群

―古代東アジア古墳文化の終着点―

平成 19 年 9 月

埼玉県・行田市 共同提案

目　次

（１）提案のコンセプト

① 資産名称・概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

② 写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

③ 図面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

（２）資産に含まれる文化財

① 整理表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

② 構成要素ごとの位置図と写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

（３）保存管理計画

① 個別構成要素に係る保存管理計画の概要、

又、策定に向けての検討状況 ・・・・・・・・・ 14

② 包括的な計画の概要／策定に向けての検討状況 ・・・・・・ ①に含む

③ 資産と一体をなす周辺環境の範囲と保全措置の概要・・・・・・・・・ 15

（４）世界遺産登録基準への該当性

① 資産の適用種別及び世界文化遺産の登録基準の番号 ・・・・ 16

② 真実性／完全性の証明 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

③ 類似遺産との比較 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

(1) 提案のコンセプト

① 資産の名称・概要

「埼玉古墳群～古代東アジア古墳文化の終着点～」

資産の概要

強力な王権による巨大な墳墓の造営は、国家形成期における世界的な現象であるが、古代東アジア社会においては、主として土盛により築造されるという共通点を有している。

東アジアにおける墳墓の起源は、中央アジアの遊牧民族とするか中国王朝とするかは意見の分かれるところであるが、古代東アジア社会の中心であった中国においては春秋時代後期に大規模な墳墓の造営が開始されており、そうした墓制は次第に鮮卑・高句麗・朝鮮半島諸国などの中国周辺地域に拡散していった。

このような中国を源流とする土盛の墳墓造営の潮流の一端が、朝鮮半島を経由して日本列島にもたらされ、3 世紀から 7 世紀にかけて、列島各地で盛んに古墳が築造されるようになった。

日本列島の古墳は、東アジアの諸地域と比べ、前方後円墳という独特の形態と巨大化さらに規模による階層性を有するという特徴をもつ。それは、古墳が首長層の権威を表徴するとともに、畿内との政治的な関係を視覚的に表現する道具として採用された結果と考えられている。

関東平野の中央部に位置する埼玉古墳群は、日本有数規模の古墳群である。前方後円墳、円墳、方墳という多様な形態を示す大型墳が密集し、古墳時代の中期から終末期にかけて継続的に造営されており，我が国の古墳文化の実相を端的に示す文化遺産である。また規格上の特徴として全国的にも稀な長方形二重周堀で、周堀間の中堤帯や後円部に造出しを有するなどの固有の特徴を有している。古墳群の出土品には、稲荷山古墳から出土した１１５文字の金錯銘鉄剣をはじめとして、銅鋺や馬冑・旗竿等、国内においても希少性の高い文物が多く含まれている。さらに、埼玉古墳群に供給された埴輪を生産した窯跡や石室に使用した石材の供給地も判明していることも貴重である。

埼玉古墳群のような大型の首長墓が密集して連綿と一地域で継起する古墳群は関東地方を北限とすることから、この古墳群を中国に端を発する古代東アジア世界の古墳に表徴される国際秩序システムの終着点に当たる文化遺産と位置づけることが可能である。

また、5 世紀～6 世紀の東アジア世界では、朝鮮半島と日本列島といった縁辺部にしか古墳が築造されなくなっており、当時の東アジア全体の古墳文化をうかがい知る資料としても貴重である。

その一方で、埼玉古墳群中の稲荷山古墳から出土した金錯銘鉄剣の文字資料は宋書倭国伝にみられる倭の五王の叙任記事との関連から、中国王朝－畿内王権－地方豪族という 5 世紀における中国王朝を頂点とする東アジア政治史を具体的に証明することができる唯一の資料である。

このように埼玉古墳群は、金錯銘鉄剣という東アジア古墳文化の絶対年代を確定する日本から発信できる唯一の資料を有する点において、他の古墳群とは異なる傑出した立場を有し、古代東アジアの国際秩序を表象する記念物の中においても稀有の存在であり、世界共通の文化遺産として優れた価値を有するものである。

② 写真

埼玉古墳群全景

丸墓山古墳・稲荷山古墳・将軍山古墳

整備が終了した稲荷山古墳

ポピー畑から見た二子山古墳

桜の時期の丸墓山古墳

③ 図面

1） 東アジアと埼玉古墳群

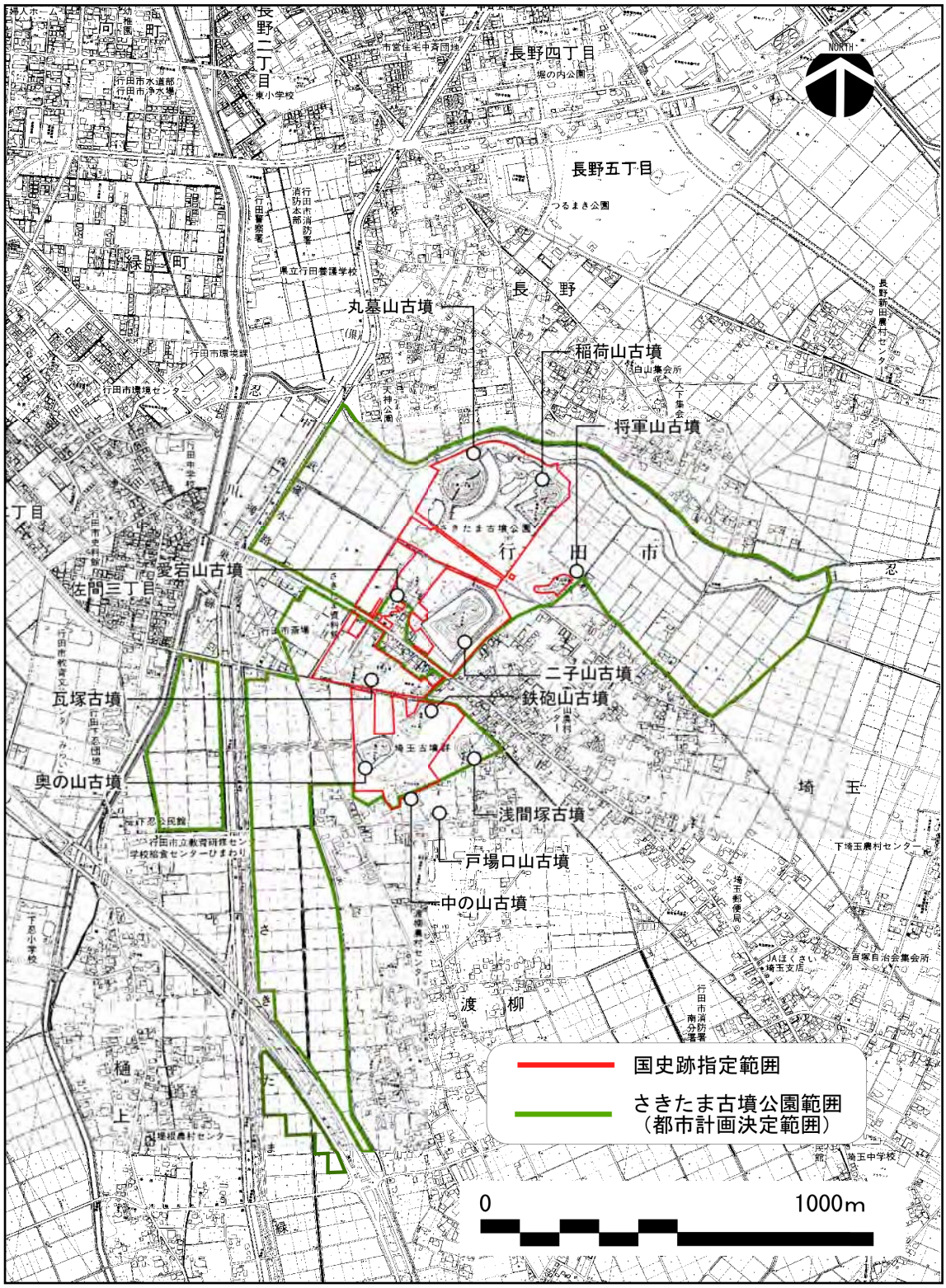
行田市と埼玉古墳群の位置

2)国宝　金錯銘鉄剣

裏　　表

金錯銘鉄剣

3)埼玉古墳群の位置



埼玉古墳群の位置

(2)資産に含まれる文化財

① 整理表

<table>
<tr><th>名称</th><th>保護の主体</th><th>保護の種別</th><th>面積</th><th>概要</th></tr>
<tr>
<td>埼玉古墳群</td>
<td>国</td>
<td>史跡</td>
<td>指定面積
22.3ha

公園供用面積
26.5ha

公園計画決定面積
97.0ha</td>
<td>
○ 概要

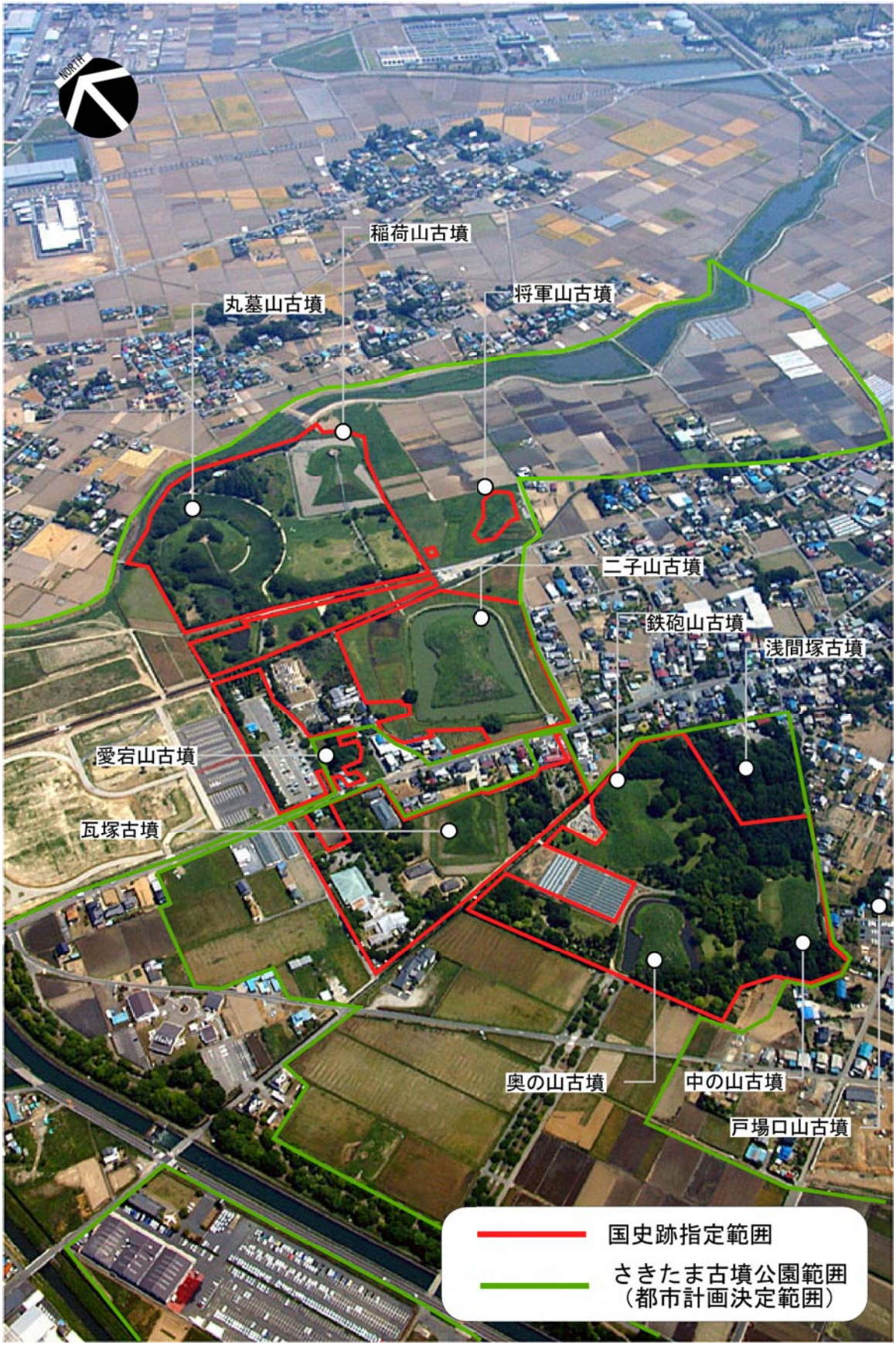
利根川と荒川に挟まれたローム台地上に、5世紀後半から7世紀前半にかけて築造された大型の前方後円墳が密集する日本有数の大型古墳群である。
古墳構成としては日本最大の円墳である丸墓山古墳をはじめ、全国的にも稀な長方形二重周堀をもつ１００m級の前方後円墳が方位を揃えて造営されており、いずれの古墳も埴輪を有している。そのほか大型古墳の周囲には小円墳が40基ほど存在していたことが判明している。
古墳群中の稲荷山古墳については主体部が発掘調査されており、金錯銘を有する鉄剣をはじめとする豊富な遺物が出土した(出土品は国宝指定)。また、将軍山古墳については古くに石室が開口し、銅鋺や馬冑、蛇行状鉄器、三葉環頭大刀など朝鮮半島と関連の強い遺物が出土している。
被葬者は明確ではないが、武蔵国造一族の墳墓とする意見がある。

○ 大型古墳構成
丸墓山古墳　円墳　直径105m　6世紀前葉 日本最大の円墳
稲荷山古墳　前方後円墳　全長120m　5世紀後葉 長方形二重周堀
二子山古墳　前方後円墳　全長138m　5世紀末葉 長方形二重周堀
瓦塚古墳　前方後円墳　全長 71m　6世紀中頃 長方形二重周堀
鉄砲山古墳　前方後円墳　全長109m　6世紀後半 長方形二重周堀
将軍山古墳　前方後円墳　全長 90m　6世紀後葉～末葉 長方形二重周堀
愛宕山古墳　前方後円墳　全長 53m　5世紀末～6世紀前葉 長方形二重周堀
奥の山古墳　前方後円墳　全長 70m　6世紀中頃 盾形周堀
中の山古墳　前方後円墳　全長 79m　6世紀末～7世紀初頭 長方形二重周堀
戸場口山古墳 方墳　一辺 40m　7世紀前半 未指定・長方形二重周堀
浅間塚古墳　円墳　直径 50m　7世紀　未指定

○ 沿革
昭和13年　国指定史跡
昭和42年から「風土記の丘」として整備開始
昭和53年　稲荷山古墳から出土していた鉄剣から金錯銘が発見
昭和58年　稲荷山古墳出土品国宝指定
平成元年　国指定史跡追加指定
</td>
</tr>
</table>

② 構成要素ごとの位置図と写真

1） 古墳の位置

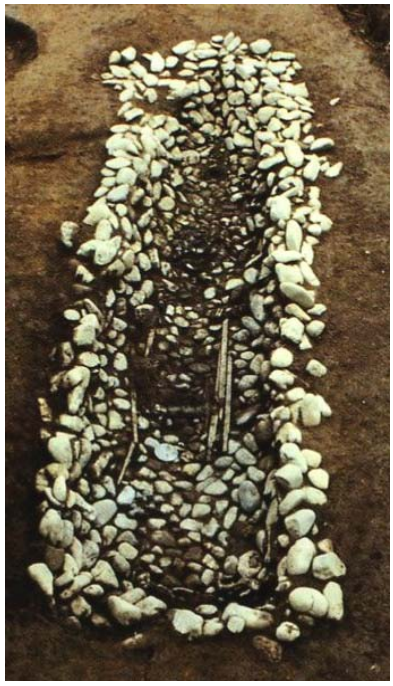


2）古墳復元想定

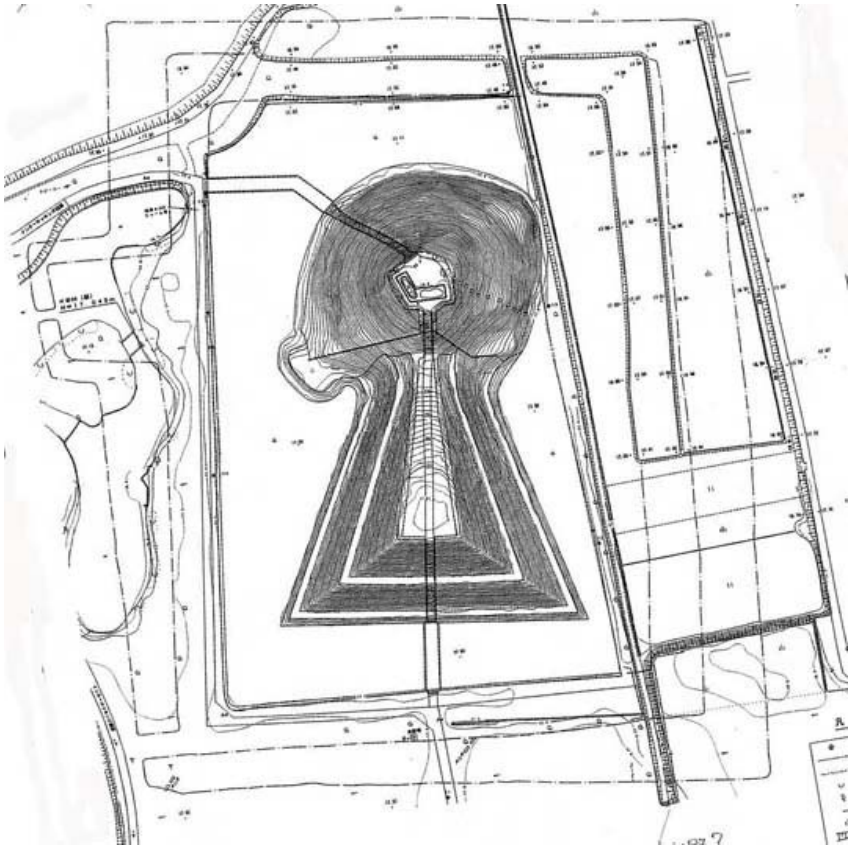
復元想定図
（史跡埼玉古墳群保存整備基本計画書より抜粋）

3) 構成要素
3)-1 稲荷山古墳

稲荷山古墳近景



後円部礫槨



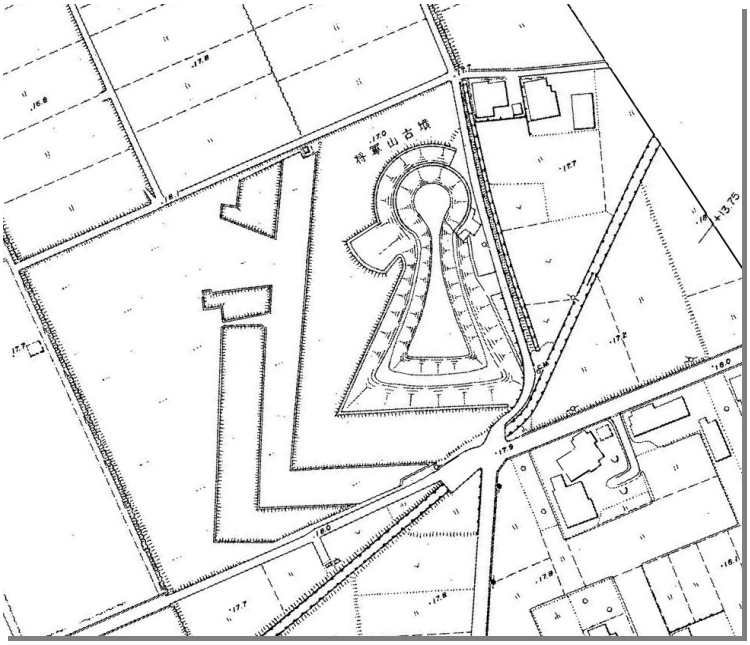
稲荷山古墳平面図

礫槨出土金錯銘鉄剣(国宝)

3)-2 将軍山古墳・丸墓山古墳

将軍山古墳近景

復原埴輪列

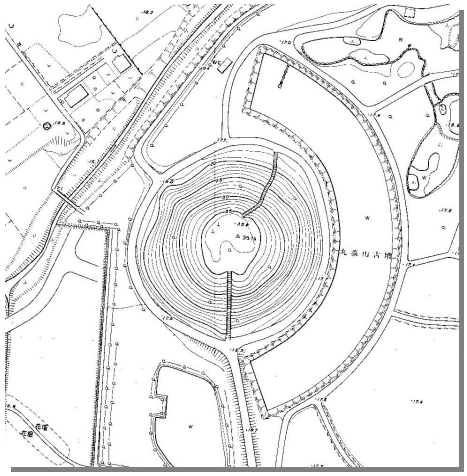


将軍山古墳平面図

将軍山古墳展示館

展示館内部

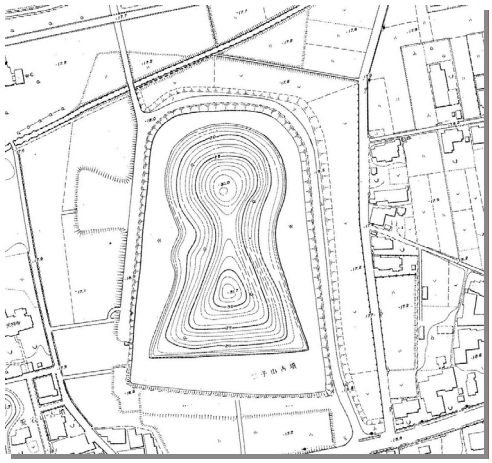
丸墓山古墳空中写真



丸墓山古墳平面図

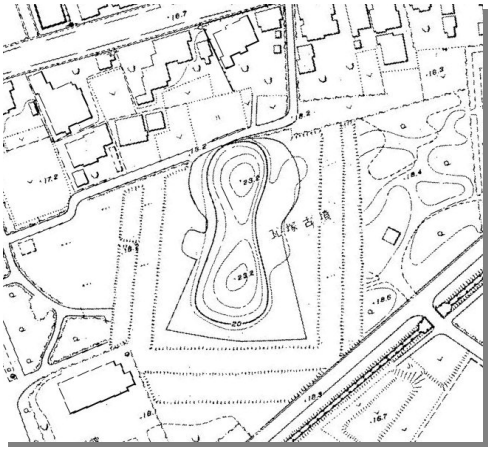
3)-3　二子山古墳・瓦塚古墳・愛宕山古墳

二子山古墳空中写真



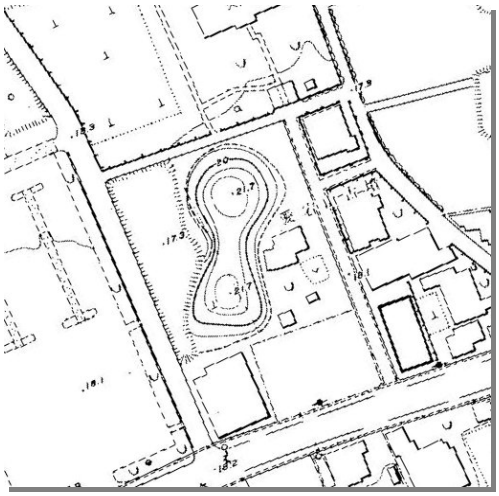
二子山古墳平面図

瓦塚古墳空中写真



瓦塚古墳平面図

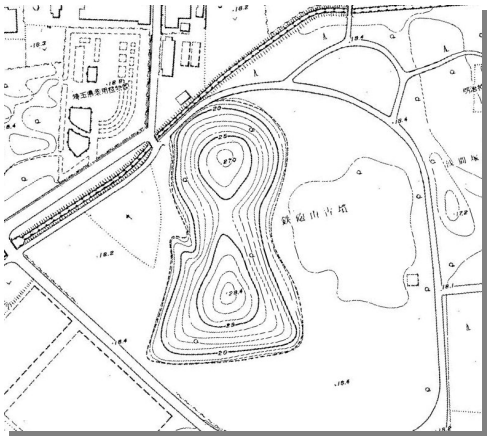
愛宕山古墳空中写真



愛宕山古墳平面図

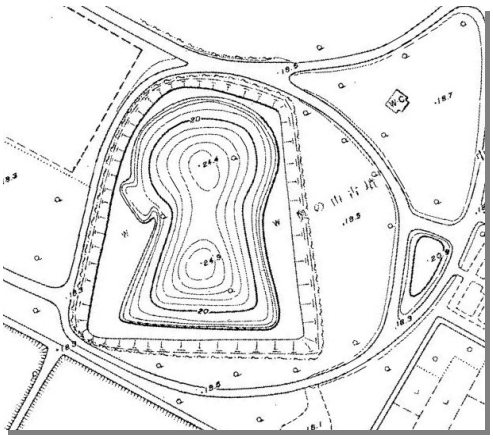
3)-4 鉄砲山古墳・奥の山古墳・中の山古墳

鉄砲山古墳空中写真



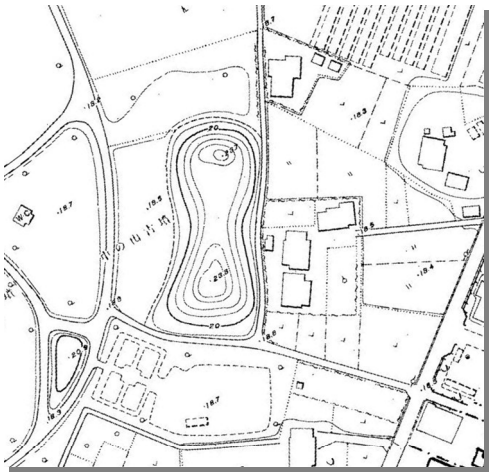
鉄砲山古墳平面図

奥の山古墳空中写真



奥の山古墳平面図

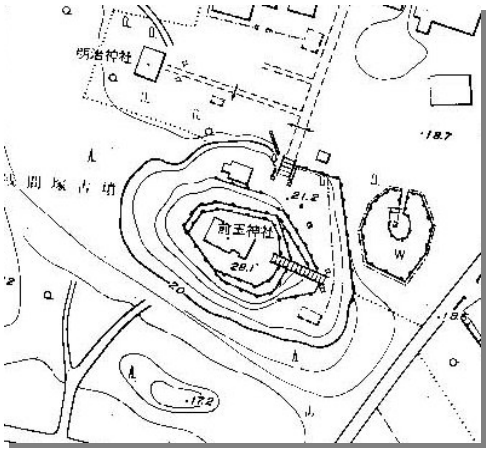
中の山古墳空中写真



中の山古墳平面図

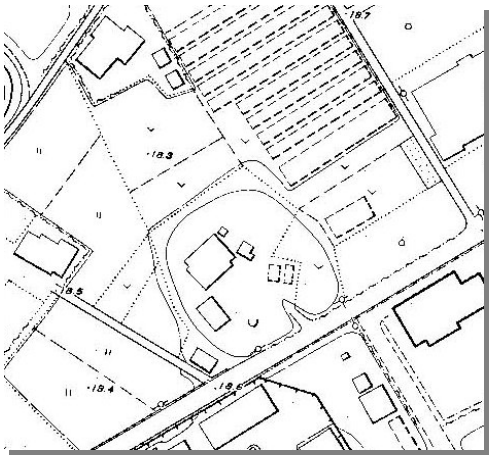
3)-5 浅間塚古墳・戸場口山古墳

浅間塚古墳



浅間塚古墳平面図

戸場口山古墳(発掘調査時)



戸場口山古墳平面図

(3) 保存管理計画

① 個別構成要素に係る保存管理計画の概要、又は策定に向けての検討状況

史跡埼玉古墳群の「恒久的な保存」や「安全で快適な歴史空間を創造する」ため、埼玉県では平成１７年度に「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画（基礎資料調査及び現状分析）」を刊行し、翌１８年度には「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画」を策定した。本計画では、「史跡埼玉古墳群の保存整備は、発掘調査成果の検証に基づいた整備とする」などの整備方針を設定し、１９年度からはこの計画に基づき、奥の山古墳の発掘調査及び解説板設置などの情報施設の整備を行なっている。また、史跡指定範囲拡大や公有化促進などの準備を開始している。

各古墳の保存と整備方針は以下のとおりである。

丸墓山古墳

直径105mの日本最大の円墳である。整備では円墳の規模をわかりやすくするため、西側周堀を整備し、堀に沿って散策できるようにする。また、樹木を整理して周辺からの古墳の眺望景観を確保する。

稲荷山古墳

国宝の「金錯銘鉄剣(きんさくめいてっけん)」が出土した全長120mの前方後円墳である。整備では、古墳範囲の復原を目指し、中堤や中堤造出し、周堀を整備する。また、中堤上を園路として活用し、墳丘へ昇降できるようにするほか、墳丘形態を損なわないように、礫槨や粘土槨を整備する。

瓦塚古墳

全長73mの前方後円墳で、堀が二重にめぐっている。整備では、移築民家等を移設して、中堤や周堀の一部を整備し、古墳の規模が理解できるようにする。また、中堤に形象埴輪列の復原を行う。

将軍山古墳

全長109mの前方後円墳で、墳丘や横穴石室が概に整備されている。今後の整備では、中堤や周堀の一部を復原整備し、中堤上を園路と活用するほか、前方部頂上にも昇降できる整備とする。

鉄砲山古墳

全長90mの前方後円墳である。整備では、古墳範囲の復原を目指し、墳丘の修景整備や中堤、周堀の復原整備を行う。中堤や周堀の整備は、既存の樹木等を生かしながら、中堤上を園路として活用する。

二子山古墳

全長138mを誇る武蔵国で最大の前方後円墳で、周堀や中堤、中堤造出しが整備されている。整備では、古墳範囲の復原を目指し、墳丘の修景整備や中堤、周堀の一部を復原整備する。また、周堀にあるハナショウブ等を生かすほか、中堤上の園路には柵等の安全対策を施す。

愛宕山古墳

全長53mの前方後円墳である。整備では樹木の残る墳丘を現況保存し、二重にめぐる周堀や中堤の復元整備を行う。また、中堤上を園路として活用する。

中の山古墳

全長79mの前方後円墳である。整備では古墳範囲の復原を目指し、中堤や周堀を整備する。墳丘は地域種の草地とし、中堤は園路として活用するほか、須恵質埴輪等を配置する。

奥の山古墳

全長70mの前方後円墳である。整備では古墳範囲の復原を目指し、墳丘の修景整備を行うほか、周堀は空堀に復原整備を行う。また、外側周堀の確認を行い、調査成果に応じた整備を検討する。

戸場口山古墳

一辺が40mの方墳である。整備は周堀を含めた範囲の復原を目指す。そのため、公有化や発掘調査が必要である。

浅間塚古墳

規模や形態は不明であるが、一連の調査から古墳であることが判明している。今後は発掘調査成果に応じた保存整備を検討する。

小円墳群

現在は、土盛りや円形のツツジ等で表現している。整備では、比較的規模の大きな円墳は墳丘や周堀を含めて立体的に整備し、その他は、ゆるやかな土盛りや周堀表示を行う。

③ 資産と一体をなす周辺環境の範囲及び保全措置の概要

1) 資産と一体をなす周辺環境の範囲設定の考え方

埼玉古墳群は広範囲に分布しており、資産の周囲には水田等の生産地域と集落等の生活地域がモザイク状に入り組んでいる。そのため、住民の十分な理解と協力のもとに、資産の完全性を保持する上で十分な範囲を、資産と一体をなす周辺環境の保全範囲として設定する。

2) 資産と一体をなす周辺環境の保全措置の基本方針

資産の保存管理を適切に進めるため、構成資産のみならず周辺の集落や農耕地等から成る周辺地域を視野に入れた包括的な保全活動を実施する。

3) 資産と一体をなす周辺環境の保全措置の概要

ア　資産は大型古墳群であり、政治的・宗教的なモニュメントとしての性格を有するため、周囲からの可視性・眺望性が求められる。従って、墳丘上からの眺望景観の整備や古墳群を望む遠景の景観整備などの遺構のみならず周囲を含めた一体的な景観の保全が必要である。周辺環境については、資産の性格と個々の地域性の調和を図るとともに、明確な範囲を決定し、保全措置を実施する。

イ　構成資産には、公園法に基づく公園の指定区域に含まれ、構成資産と一体となった保全が図られているものもあるが、保全措置が十分でない地域については、市の景観計画を基に、自然と歴史を生かしたまちづくりの景観保護条例を策定し、構成資産の保護と共に周辺環境の保全を推進する。

ウ　景観保護条例による保全のほか、構成資産を含む指定地内のみならず周辺環境における開発等に関しては、市政に対する諮問機関等による勧告制度を設けるなど、複数次にわたる規制管理システムを構築し、変更行為が景観に影響を与えることのないように努める。

エ　構成資産の保存に係る周辺環境保全の重要性について、住民の認識を得ることを目的に、埼玉古墳群の普遍的価値を理解するための学習機会の提供など啓発活動を積極的に実施する。

(4) 世界遺産登録基準への該当性

① 資産の適用種別及び世界文化遺産の登録基準の番号

〔適用種別〕

記念工作物及び遺跡

〔登録基準〕

ⅱ 古墳は政治的記念碑であり、古代東アジアの葬送観念や厚葬思想の交流を具体的に示すものである。５～６世紀には中心部分では古墳の造営が行われなくなっており、東アジアの縁辺に位置する埼玉古墳群は、古代東アジア全体の葬送観念や厚葬思想の交流を具体的に示す貴重な記念碑である。

ⅲ 古墳は、古代東アジアに一定の広がりを有し、共通する副葬品を伴うことから、その文化的伝統を示す存在である。

ⅳ 古墳は、古代の日本列島の歴史上の重要な段階を物語る建築物であり、特に埼玉古墳群は金錯銘鉄剣という出土品によって、確固たる位置づけが与えられるものである。

② 真実性／完全性の証明

埼玉古墳群は、昭和４２年度から今日までの継続的な学術調査を実施しており、盛土の造成、主体部の構築、周堀の掘削、埴輪等の敷設等、築造当時の姿が次第に判明し、意匠・形状・材質ともに当時の状態のままであることが証明されている。遺構の時期については出土遺物の学術的な検討を経て、確度の高い推定となっている。

経年変化による遺構の損壊部分については、学術的調査結果をもとに復原整備を実施し、当時の姿の復原に努めている。なお、復原に当たっては国内の関係各分野の専門家の指導・助言を受けつつ慎重に進めている。

一方、古墳群の大半は、国指定史跡に指定されており（昭和 13 年指定、平成元年追加指定)、その保護は法的に保証されている。また、県では埼玉古墳群を包摂する１００万㎡級の大規模な県営「さきたま古墳公園」として整備を推進しており、将来にわたり万全の保護措置がとられている。

なお、現状では埼玉古墳群を構成する戸場口山古墳や浅間塚古墳など大型古墳の一部が指定地外に位置しているが、県では「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画(平成 19 年 3 月策定)」を策定し、将来的な埼玉古墳群の完全な保全計画を立案済みである。古墳群の範囲は、これまでの部分的な調査によりほぼ把握されているが、正確な範囲の確定は、今後の確認調査により学術的に実証する計画であり、その後は追加指定の申請及び公有化等の必要な保護措置に努める予定である。

③ 類似遺産との比較

国内には、約 4 万基もの古墳が存在し、前方後円墳だけでも約 5,200 基存在する。また、単体の古墳としては 300m～400m級の古墳も他に所在する。

しかしながら、大型の円墳、方墳、前方後円墳が揃い、特に 100m級の大型前方後円墳が共に長方形二重周堀を備えて、これほど密集している古墳群は、国内はもとより東アジア諸国においても他には存在しない。

加えて、5 世紀の政治構造を具体的に証明する１１５文字の文字資料が刻まれた金錯銘鉄剣を出土した古墳が存在する点は、他に例を見ない稀有のものである。